中国映画に見る「家族」
――『唐山大地震』を中心に――

高橋　俊

中国における家族とはどのようなものなのか。もしくは、どのようなものとしてイメージされているのか。この大きなテーマを、本稿では『唐山大地震』（馮小剛監督、二〇一〇）という映画を中心に見ていくことにする。

この映画は、一九七六年七月二八日早朝（映画内では夜一〇時ごろに設定されている）に河北省唐山市一体で発生した、マグニチュード七．八の巨大地震をテーマにした映画である。この地震では二四万人あまりが死亡、一六万人以上が負傷し、四二〇〇人あまりの孤児が発生した。

映画『唐山大地震』はこの地震をテーマに、家族の愛を描いたという触れ込みである。邦題が『唐山大地震――想い続けた三十二年』であるように、生き別れた家族とその再会が描かれており、両親と双子の姉弟という四人家族の「愛」が描かれる。公開と同時に大ヒットし、二〇一七年現在、中国映画の歴代興行収入で七九位となっている[1]。なお日本でも二〇一一年三月二六日に公開予定だったが、三月一一日の東日本大震災の発生により公開は延期。現在でも上映はされておらず、DVDの発売のみとなっている。

さて、災害によって家族の愛が確認される、というストーリーでは、ハリウッドのいわゆるディザスター映画が真っ先に想起されるであろう。詳細は後述するが、『唐山大地震』はディザスター映画の枠組みを踏襲しつつも、中国特有の「家族観」がうかがえる、たいへん興味深い仕上がりになっているのである。以下、分析を加えていく[2]。

一　映画『唐山大地震』

この映画では、始まってまもなく、いきなり地震のシーンが登場する。その時、父母はトラックの中で睦みごとの最中であり、姉弟はアパートの自室で寝ていた。臨場感のある地震のシーンが続いた後、父親があっけなく死ぬ。残された母親は呆然としつつも必死で子供たちを探すが、二

人は崩れたアパートの生き埋めになっていた。姉か弟、どちらか一人しか助けられない、という状況下で、母親は弟を選ぶ。その母の選択を、姉は建物の下敷きになりながらも聞いていたのだった。姉は遺体となって運ばれ、母親は号泣しつつ許しを請うのだが、実は姉は生きており、しかし一時的に記憶喪失状態となっていて、子供のいない解放軍人夫婦の養子となる。

弟は命は助かったものの、右手を失っていた。その後母親と二人で唐山にて暮らしていたものの、このままでは一生うだつが上がらないままだと察した彼は、一旗揚げるため、唐山に母を残して友人たちとともに南方の杭州へと旅立つ。

軍人夫婦に育てられた姉は医科大学に入学するが、在学中に養母を病気で失う。そしてボーイフレンドの子供を宿すが、捨てられ、大学を退学してシングルマザーとして生きる道を選ぶ。カナダに渡り家庭教師をして糊口をすすぐうち、十六歳上のカナダ人弁護士と結婚。当地で恵まれた生活を送る。

弟は杭州で旅行会社を設立し、成功。妻を娶り、男児に恵まれる。唐山で一人暮らしを続ける母親を何度も杭州に呼ぼうとするが母は聞き入れず、せめて唐山市内のマンションをプレゼントしようとするが、夫と娘の遺骨を守ろうとする母親は、元の家を離れようとしない。

やがて二〇〇七年に四川省で地震が勃発。それぞれニュースで災害の様子を知った姉弟は、救助隊にボランティアとして参加する。当地でボランティア仲間に唐山大地震の記憶を語る弟の話を側でたまたま耳にした姉は、この男性が自分の弟だということに気づく。そして弟とともに唐山に帰郷し、母や弟一家と再会。みんなで父の墓参りをするシーンで幕を閉じる。

「はじめに」でも述べたように、この映画はディザスター映画というジャンルに入るべき映画である。映画の冒頭の地震のシーンは、ハリウッドのディザスター映画の影響を多分に受けた作りとなっており、CGを駆使して、迫力のある映像となっている。しかし『唐山大地震』は、ディザスター映画においては通常一番の見所となるであろう地震のシーンが、冒頭に来ているのである。これが、ハリウッドのディザスター映画を見慣れた我々には、大きな違和感を残す。

さてそもそも、ハリウッドのディザスター映画というのは、同時に家族映画でもある、というものがきわめて多い。典型的なストーリーは、まず精神的にバラバラな家族の描写、とくにだらしない存在としての父親の描写が置かれる。やがて家族に災害が襲いかかり、ジワジワと被害や恐怖が広がり、パニックに陥る。しかし、父親の超人的な活躍によって危機を脱し、最後は家族が完全にひとつにな

って終了する、というものである。家族を救う過程で、父親が命を落とす場合も多い[3]が、それはむしろ、家族が一体となる上での重要な媒介になる。災害から逃げる過程での単独行動は、俗に「死亡フラグ」という言葉で表されるように、死を意味する。家族（やそれに準じる人々）が一体となって行動することが何よりも重視され、それを経ることで、家族が再生されるのである。

では『唐山大地震』はどうか。ディザスター映画との違いで真っ先に気づくのが、前述のように地震のシーンが映画の冒頭に置かれていることである。ディザスター映画では災害のシーンこそが映画の中心であり、すぐには終わらず少しずつ恐怖が広がっていくように構成するのが、『唐山大地震』では真っ先に置かれ、すぐに終わる。父親は自分の力を発揮する暇もなく、あっけなく命を落とす。母親も、瀕死の子供たちを前に、為す術なく救助者に身を任せるのみである。父親が死に、娘も死に（死んだと思われ）、残された母親は「天はなぜこんな仕打ちをするのか！」と叫ぶことしかできない。映画が始まって間もなく、家族は文字通りバラバラになってしまうのである。

残りの時間の多くを使って描かれるのは、生き残った家族三人それぞれの人生である。各人が必死で生きてきた、そのエピソードが断片的に語られていく。そして最後に、まったくの偶然によって三人がつながり、一つになったところで映画は終わる。映画の最後には唐山大地震で亡くなった人々への献辞も捧げられ、感動的な余韻を残す。

同じく「災害に翻弄される家族」を描きながら、ディザスター映画と『唐山大地震』はなぜここまで違うのか。一方は当初バラバラだった家族が、災害をきっかけに、父親の力によって一つになる姿を描く。一方は災害によってバラバラになった家族が、それぞれ生活を営み、最後にまったくの偶然によって一つになる。しかも『唐山大地震』では、おそらくこの後、家族三人は相変わらずバラバラに住み続けるであろう。それぞれがそれぞれの場所で生活しつつ、春節には里帰りして短いながらも家族水入らずの時間をすごす。そしてこれが、母の死まで続く。夢のない話ではあるが、おそらく高い確率でそうなるし、またそれがある種のハッピーエンドともいえるのである。

もちろん、これは私の勝手な推測である。が、こう考えるのも決しておかしくはない、中国家族の特徴があるのである。次章では、この点についてのべていく。

二　中国の家族――家族の価値・家族の意味――

中国の家族とは、一体どういうものなのか。これはあまりに茫漠とした問題設定である。「時代によって違う」「地域によって違う」のは当たり前だし、細かく見ていけば「家

族ごとに違う」ともいえる。しかし一方で、「中国の家族形態」これまで多くの研究の蓄積がある分野でもある。ここでは先行研究を踏まえ、「中国の家族の特徴」についてごく簡単にまとめておく[4]。

一般的に中国は「家族のつながりがとても強い」といわれる。身近なところでいえば、お正月（春節）は家族が全員揃って食事をするのが当然といわれる[5]。「家族」の指すところの範囲も広い。日本ではおおむね「同居人」を指すことが多く、同居していない祖父母やオジオバは含まないのが一般的である。これに対して中国では、同居は関係なく、祖父母はもちろんオジオバ、そしてイトコもみな「家族」である。これら「家族」とは（現在ではSNS等を通じて）日常的に連絡を取り合い、情報交換をしており、イトコはきょうだいも同然、という価値観が一般的である[6]。育児も家族全員で行うのが当たり前であり、日本のように両親、とくに母親に育児が集中するということは少ない。夫婦共稼ぎが多い中国では祖父母が孫の面倒を見るのは当たり前であり、両親が都会、あるいは海外に出稼ぎに出ている場合には祖父母が文字通り「親代わり」として育児を行うことも、ごく普通に見られる[7]。

以上のように、家族の凝集力が強い中国だが、一方で、家族がバラバラで住むことになんの躊躇いもない（ように見える）のも、特徴である。上で書いたように、乳飲み子がいても、出稼ぎに出ることに両親ともに障壁は少ない。出稼ぎ先が海外であっても（海外ならなおさら？）、チャンスを求めて出かけていくのが、「中国流」なのである。「家族」（中国風の、範囲の広いものだが）の誰かが海外に住んでいる、というのはごくありふれており、私が接するような中国人で、家族みんなが中国国内に居住しているほうが珍しい、とすらいえるほどである。

こうした「二面性」は、日本人からすると奇異に映るであろう。結束が固いというのはすなわち一緒に住む、ということではないのか？　バラバラに住んでいるのでは、結束が固いとはいわないのではないか？　と。

その疑問に答える前提として、「そもそも家族とはどのような集団なのか」「何のために家族はあるのか」という疑問が、新たに設定されよう。繰り返すが、家族の形は「日本人」であろうと「中国人」であろうと、あるいは「日本人と中国人の混合」であろうと、さまざまである。バラバラな家族もあれば、仲の良い家族もある。それを絶対の前提とした上で、「家族像」の最大公約数的なイメージを語るとするならば、中国人にとって家族とは、徹頭徹尾「利益で結びつくもの」なのである。たとえば子供。「小皇帝」といわれるように、中国人は両親、あるいは祖父母も、子供を溺愛する。一人っ子がほとんどという事情はあるにせよ、しつけなどというものはほとんど存在しないかのよう

に、子供のやりたいようにさせる。しかしその一方で、小学校に上がるくらいから、子供には過酷なまでの受験勉強を強いる。朝から晩まで学校で勉強、帰ってきてからも大量の宿題をこなす。部活などの課外活動が割り込む余地はほとんどない。こうしたことを、大学受験まで延々積み重ねていくのである。そしてその勉強の先には、ひとまずの最終目的である大学受験、そしてさらにその後には（海外留学などを挟んだあとに）就職が待っている。中国の就職では、大学名、そして（留学経験を含めた）「資格」の意味は日本とは比べ物にならないくらい大きい[8]。いい大学に入り、いい会社に就職する、という理想のライフコースは、日本のそれよりもずっと強烈に渇望されている。そしてそれは単に「子供の将来を願う」だけが目的なのではない。とにかく子供に少しでも多く稼いでもらい、老後に「自分たち（親、そして祖父母）」がいい暮らしを送れるようにすることこそが目的になる[9]。その「いい暮らし」も、基本的には経済的に恵まれている、ということである。「家族が仲良く一緒に暮らす」などという情緒的なものは、中国においては家族がまとまる凝固剤とはなりえない。

こうした中国の家族観を日本人に提示すると、一様に「それはおかしい」という反応を返す。「そんな欲得ずくの家族なんて、本当の家族ではない」と。しかし中国人からすると、日本の家族のように「一緒にいる」ことを重視する価値観は、なんとも不思議に思えるだろう。「一緒にいたって、お金がなければ意味がないではないか」と。

さて、中国のこうした価値観は、中国の伝統的な死生観も影響している。中国において、死後の世界は日本よりはるかに現実的なものとして想定されている。すなわち、死者は腹も減ればお金も必要になる。さらには、車も欲しいし大きな別荘もほしい。そういう存在として、死者は想定されている。

ゆえに死んでからのお供えの多寡は、死後の生活レベルに直結する。特に重要なのは、子孫の有無である。「不孝に三あり、後なきを大なりとす」という言葉に典型的に表れているように、お供えをしてくれる子孫をまず確保することが、自分にとっても、そしてご先祖にとっても、きわめて重要なのである（なお中国では、死者にお供えができるのは、血のつながった子孫だけと考えられている。ゆえに「永代供養」などは意味をなさない）。よって子供が多く稼ぐことは、生きている親や祖父母のみならず、さらにその先祖の生活を保証するためにも、きわめて重視されるのである。

こうした「生き方」もしくは「生きる知恵」は、科挙に由来するといわれる。科挙とはいうまでもなく、中国の伝統的な官僚登用試験である[10]。科挙についての詳述は控えるが、ポイントは二つ。「男子であればほぼ誰でも受け

られる」と「長い間の勉強が必要」である。さらに、科挙に合格すれば、莫大な収入が保証される。ゆえに多くの男子が試験に参加する一大イベントとなったと同時に、一年や二年の勉強で受かるものではない、極めて狭き門となったのである。

この一大イベントに、中国人は「宗族の結集」で対処しようとした。できるだけ家族の人数を増やす（＝分母を増やす）ことで、一族から科挙合格者が生まれる確率を増やしたのである。仮に一族の数が多くても、得られる収入が桁違いなため、一族であるというだけでその「おこぼれ」にあずかれるし、それを夢見て、中国人は代々生活してきた、といっても過言ではない。

またそもそも中国では祖先祭祀の観点から一族の数は多ければ多いほどよいと考えられていた。「質（科挙合格者を出すこと）」と「量」とを両方満たすことが、中国の宗族の特徴だったのである。

中国のこうした伝統的な観点が、「利益で団結する家族」を生み出したといえよう。繰り返すが、中国の家族は「一緒にいる」という情緒的なものには価値を置かない。なによりも経済的な豊かさが重要視される。なお科挙は二〇世紀初頭に廃止されたが、近年の受験勉強の激しさは科挙に比類するものといわれるし、それに対する若者の不満もたまっている[11]。とはいえ一人っ子が多くを占める現代の中国において、子供への期待は増すばかりである。

三　「バラバラ」の利点

以上を総合すると、中国人にとって、家族がバラバラに住むのはなんらおかしな話ではなく、むしろ賢い選択と考えられていることが分かる。ポイントは二つである。

一つは、収入面。家族の合算した収入を少しでも増やすためには、「一緒に暮らす」ことの利点などは二の次となる。各人が少しでも多く稼げるところに行き、できるだけ稼ぐことこそが、結果的に「家族のため」になる（と考える）のである。

もう一つは、リスク分散。現在でもよく、「中国国内で不正に蓄財した官僚が国外に逃亡した」というニュースが報道される。「逃亡を企てる官僚」にとって、重要なのは、何よりも「逃げる先」である。単独で逃げるのは危険が伴うし、逃亡先での生活もおぼつかない。家族の誰かが海外に拠点を作り、いざという時にはそこに本人や財産を移すことは、「後ろめたい収入」のある者にとっては必須といえる。

後ろめたくなくても、中国は昔から「いざという時」が多いと考えられてきた。洪水。そして唐山大地震のような災害。あるいは国内で数多く起こってきた戦乱。これらの

発生は、中国の人々の流動性を高める役割を果たしてきた。そしてこれも、一方では「籍貫」と呼ばれる「宗族の発生地」を重要なものと定めながら、他地で暮らすことになんの抵抗もないというもう一つの二面性を生んできたのである[12]。この映画においても、母が息子の「マンションで一緒に暮らそう」という再三の誘いも断り、（家族四人が暮らした思い出の家、というわけでもない）〈場〉に固執するのに対し、一方息子はとくにためらいもなく家を飛び出す、この二面性は一見奇異に映る。

話を家族に戻すと、ではなぜ家族なのか、という疑問が浮かぶ。頼るのは友人でもいいわけで、なぜそこまで家族にこだわるのか、と。これに関しては確固とした理由を突き止めるのはなかなか難しく、往々にして「中国の家族意識が強いから」というトートロジーの説明になってしまう。「家族意識が強い」は原因なのか結果なのか、という疑問も湧いてこよう。

ただやはり、「流動性が高い」というのは大きな要素になるのだろう。中国は農民であっても、日本のように「先祖代々同じ土地を耕し続ける」というケースはそれほど多くはない。洪水などの災害により、土地を追われることが珍しくはなかった。ゆえに人間関係を土地に結びつけるのは、そもそもリスクが高い。ゆえに、バラバラであっても関係が持続する（と考えられる）家族の凝集力のみが強まったのであろう[13]。

以上見てきたように、中国の家族はむしろバラバラな状態が前提とも思えてくるようなものである。家族のためを思えば、むしろ遠くに住むことが望ましい、という観念すら持っていそうである。以上を前提として、次章では改めて『唐山大地震』を見てみることにする。

四　「バラバラな家族」の家族映画

この映画では、家族があっという間にバラバラになるが、しかしその引き換えとして、家族はむしろ「経済的成功」を手に入れた。弟は母親を独りにすることを顧みず、家を飛び出したおかげで、事業に成功することができた。姉は、早々に家族と離れたおかげで、裕福なカナダの弁護士と結婚し、満ち足りた生活を送ることができた。もし、あの地震が起こらず、家族が一緒に暮らしていたならば、このような「成功」は手に入らなかったかもしれないのである。

もちろんこれは、あくまで仮定の話である。あの地震が起きてなくても、家族は成功したかもしれない。あるいは家族が「現実」に歩んだ道筋を「成功」といってしまっていいのかも、疑問の余地があるだろう。「父親が死んで、家族も長い間バラバラになって、いったいどこが幸せなんだ」と考えることは、十分可能である。

しかし、「家族の意味」、あるいは「幸せ」の価値をどこに置くかは、〈文化〉によって異なるのも、また事実である。「たとえ貧しくても、家族が一緒に暮らすのが幸せだ」と考える文化もあれば、「たとえバラバラでも、お金がふんだんにあることが幸せだ」と考える文化もあるだろう。「幸せ」の指標は、大きく異なるのである[14]。

前述のように、中国の「幸福」に、経済的豊かさは欠かせない。そういう意味で、この家族は、父親を失い、一緒にいられたはずの時間を失ったが、一方でお金を得ることができた。この映画のラストは、完全なハッピーエンドではないかもしれないが、しかし決して悪くはない、というものではなかろうか。

同じような趣旨の映画として、『我的兄弟姐妹（邦題：再見　また逢う日まで）』がある。こちらも、家族愛を前面に押し出した映画である。両親と四人きょうだいが貧しいながらも仲良く暮らしていたが、両親が事故で死亡。きょうだいはバラバラになるが、台湾に渡って著名な音楽家になった姉が大陸でのコンサートに合わせてきょうだいの捜索を行う。すでに互いの行き来もまったくなくなっていた三人をそれぞれ見つけ出し、最後にコンサート会場で再会する、というものである。これも「家族バラバラ」のストーリーであるが、やはりそれは、その後の「成功」を導くための布石となっている。この映画で「成功」していたといえるのは姉（第二子）のみであり、また両親もすでにないが、それでも一人が成功していれば、それで十分なのであろう。きょうだいはこれから、経済的成功を収めた姉を頼りつつ、それぞれが楽しく暮らすのではないか。そんな「その後」が予想されるストーリーである。

もちろん、「バラバラな家族が一つになる」という点で、日本や、あるいはハリウッドの典型的な家族映画と違いはないではないか、という疑問もあるだろう。もちろん、共通する点も多いにあるし、そういう意味で「いい家族」のイメージは世界共通のものである、といういい方もできるだろう。しかし中国映画の場合、やはりそこには、根本的な違いがあるように見て取れる。それはすなわち、家族にとって、あるいは個人にとって、究極の価値はどこにあるのか、という点である。繰り返すが、中国の場合、そこに経済的な豊かさが根強く存在することは、否定できないのである。

もちろん、日本であろうとアメリカであろうと、実際の・現実の家族においては経済的な利害が大いに影響している。日本人がみんな損得勘定なしで家族を構成しているわけではない。家族が金銭で揉めてバラバラになる、あるいはすでに精神的にはバラバラな家族が、金銭的な理由のみで一緒に暮らしている、といった話題は枚挙にいとまがない。

しかしながら、そこには「本音と建て前」がある。すなわち、映画に出てくる家族は、あくまで「想像上の家族」であるという点である[15]。困難を克服して最終的に形成された家族はいかなる形態なのか。そこに、「建前上の理想の家族」像が描かれるのである。

その点で、中国の家族映画は、やはり着目すべき違いがある、といえよう。日本の家族映画の、金銭を犠牲にしてでも一緒にいることを選ぶ、という展開に比べ、その違いは明らかである。

おわりに

最近、ツイッター上で「〝子供がいないと老後困るぞ〟という人がいるが、そういう人は自分の老後のために子育てすると宣言しているわけで、なんと浅ましいのだろう」という主旨の投稿があった。家族に限らず、日本においては、「金銭目当て」と公言することは、「浅ましい行為」とみられる。

もちろん、そういう考えがおかしいというわけではない。が、「金銭目当て」を最初から、完全に除外することは、むしろ生き方を狭める結果にもなるだろう。生き方もさまざまであり、家族のあり方もさまざまのはずである。どちらが正しいとか尊いということではない。

『唐山大地震』は、中国における家族の形を描いた、貴重な映画といえるであろう。そしてそこに描かれた家族の形は、我々が家族を考える意味でも、大きな意味を持つと思われるのである。

注

1 「中国内地電影票房総排行」(https://www.douban.com/doulist/1295618/ 最終アクセス日二〇一七年十一月七日)。

2 『唐山大地震』に関する先行研究としては、好並晶「「人倫」への優しき眼差し――中国映画『唐山大地震』を観る――」(『関西大学中国文学会紀要』第三十三号、二〇一二)がある。原作の張翎「余震」との比較から、「倫理映画」としてこの映画を読み解くものであり、大いに参考とした。

3 『インディペンデンス・デイ』『アルマゲドン』等。

4 中国の家族に関しては、石原邦雄他『現代中国家族の多面性』(弘文堂、二〇一三)、首藤明和他『分岐する現代中国家族――個人と家族の再編成』(明石書店、二〇〇八)、石原邦雄『現代中国家族の変容と適応戦略』(ナカニシヤ出版、二〇〇四)、瀬川昌久『中国社会の人類学――親族・家族からの展望』(世界思想社、二〇〇四)等を参照。また中国の家族は伝統的には「宗族」と呼ばれ、そちらの方面の研究の蓄積も多い。近年のものでは、瀬川昌久他『〈宗族〉と中国社会――その変貌と人類学的研究の現在』(風響社、二〇一六)がある。

また近年話題になった「中国の家族」に関するルポルタージュとして、メイ・フォン『中国絶望家族――「一人っ子政策」は中国をどう変えたか――』（小谷まさ代訳、草思社、二〇一七）がある。

5 『唐山大地震』においても、独り暮らしをする母親、あるいは姉の養父に対し、子供が「独りで春節を過ごすの？」と心配して聞くシーンが再三にわたり差し挟まれる。

6 私が「イトコは二十人近くいるが、今は誰とも連絡を取っていない」と中国人に話すと、一様に驚かれる。

7 『唐山大地震』では、弟夫婦が産まれたばかりの息子を母に預け、妻の実家に春節の里帰りをするシーンが出てくる。これなど、日本ではほぼあり得ないことであろう。

8 中国の大学における就職活動については、福島美雪『中国の大学生の就職難に関する研究――大学・学生・企業それぞれの視点から――』（二〇一六年度高知大学修士論文）で詳細に調査・分析されている。

9 『唐山大地震』においても、大学受験を諦める息子に対し母親が「あんたが大学受験しなかったら、私がお祖母さんに怒られちゃうわよ」と諭すシーンがある。また「一人っ子政策」のもたらしたこうした「弊害」については、前掲『中国絶望家族』を参照。同書の原題はズバリ「一人っ子(One Child)」である。

10 科挙についての研究は枚挙にいとまがないが、ひとまず、宮崎市定『科挙――中国の試験地獄』（中公新書、一九六三）と村上哲見『科挙の話――試験制度と文人官僚』（講談社現代新書、一九八〇）という二つの基本文献を挙げておく。

11 『八〇後』の作家である韓寒や郭敬明らは、こうした若者の不満を描き、同年代の若者の人気を博した。

12 一族が記す「族譜」には一番古い「ご先祖様」が発生地からやってきて現在居住する地にたどりついた、という記述で始まるのが一般的である。瀬川昌久『族譜――華南漢族の宗族・風水・移住――』（風響社、一九九六）を参照。

なお「落葉帰根」という言葉が表すように、「死んだあとはかならず故地に戻って埋葬する」というテーマでは多くの小説や映画が作られており、代表的なものはその名も『落葉帰根』（張楊監督、二〇〇七）という映画である。

13 とはいえ、中国の人間関係は決して家族のみではない。学生時代の同級生は重要な関係の一つと考えられているし、そもそも「人間関係」の持つ意味が日本よりもずっと強い。「コネ」が決して悪い意味ではなく、むしろコネの有無がその人の「能力」の重要な要素である、と考えられているのである。デイヴィッド・ツェ『グワンシ――中国人との関係のつくりかた――』（吉田茂美訳、ディスカヴァー・トゥエンティワン、二〇一一）等を参照。

また、中国はそもそも公的年金等が公務員以外には整備されていない「小さな政府」の国であり、ゆえに家族に頼る傾向が強い、という要因もある。これに関しては、同じく「小さな政府」であるアメリカも、家族のつながりを重視する傾向にある。筒井淳也『結婚と家族のこれから――共働き社会の限界――』（光文社新書、二〇一六）、一六五頁。

14 東アジアの「幸せ」については、猪口孝『データから読むアジアの幸福度――生活の質の国際比較』（岩波書店、二〇一四）を参照。

15 本稿では、家族映画に出てくる家族を「（作り手がイメージする）理想の家族」である、という前提で論じている。もちろん、この見方には異論もあろう。「映画をどう見るか」に関しては、坂本佳鶴恵『〈家族〉イメージの誕生――日本映画にみる〈ホームドラマ〉の形成』（新曜社、一九九七）を参照。

（たかはし・しゅん　本学教授）